ドラゴン禅問答

Yusaku Kikuchi

ブリザードの吹き荒れるマウント・ドラゴニアの山頂。深い闇と白い雪の対比が、これから待ち受ける死闘の壮絶さを物語る。熊の毛皮でできたコートを鋼鉄の鎧の上に羽織った勇者は、銀色の長髪をたなびかせつつ、エルフ族の剣先をドラゴンの鼻へと突き立てる。

『『厄災』よ、お前は終わりだ」

「待て、『世界に夜明けを告げし者』よ。汝のためを想い、我から伝えておきたいことがある」

「なに？　笑えるな。世界を破滅させようとした奴が今更なにを言うというんだ」

「違う」

「なにが違うんだ」

「いいから聞け」

『厄災』は涙目で語る。

「おまえは代替可能だ」

沈黙が竜と勇者に降りかかる。

「……おまえは何を言っているんだ」

「残念ながら我の言うことは本当だ。汝も代替可能で、それは我も同じだ。汝の故郷にいる『定命の者ども』も、汝が旅路の中で切り捨ててきた『使い』どもも、皆すべて代替可能だ」

「まったく意味がわからないな」

「では、これを見るがよい」

すると『厄災』は突然、自分の首を噛みだした。開いた傷口からは赤黒い血が炎のように吹き出す。

「おい！　何をしている！」

『世界に夜明けを告げし者』が竜の自殺を静止しようとするも、彼は一向に止まる気配がない。

勇者は思いがけず竜の頭にしがみつく。いくら故郷を焼き尽くされた相手でも、目の前で自ら命を断とうとすることは看過できなかった。

「離せ！　これは大したことではない！」
「いいや大問題だね！　『厄災』よ！」
『『さん』を付けろエルフ野郎！」
竜は物凄い勢いで頭を振り、しがみつく勇者を引き離した。
それと同時にドラゴンの首筋から恐るべき量の赤ワインが吹き出し、勇者を真っ赤に染めた。
「ぐっ！」
勢いで吹き飛ばされた勇者は、山の岩壁に叩きつけられた。
「これでおさらばではないぞ、勇者よ。しかと見ておれ！」
竜は最後の力を振り絞り、思い切り自らの首を噛んだ。
その勢いで竜の首は胴体から切り離され、断面から再び鮮血が噴水のように飛び出した。返り血が勇者を真っ赤に染める。
「ああ……」
勇者は力なく膝から崩れ落ちた。こんな終わり方でいいのか。世界は救われたが、これでは故郷のティル・ナーグで命を落とした人々に全く示しがつかない。まさか、このエルフ・ソードを一振りもせず『厄災』を倒してしまったとは。彼は情けなさと不甲斐なさに大いに泣いた。母よ。あなたの愛を無下にしてしまった。父よ、あなたの誇りに唾を吐いてしまった。
ズドン！
突然竜の死体が消えたかと思うと、即座に無傷の『厄災』が再び勇者の目の前に現れた。それと同時に勇者にべったりと付いていた返り血も消えた。
「……は？」
「久しぶり？　だな。『世界に夜明けを告げし者』よ」
『『さん』を付けやがれ終末野郎！」
勇者は状況を理解する前に体が動き、今度こそは自らの手で『厄災』を殺めようとエルフ・ソードを振るった。
だが努力もむなしく、ドラゴンはひらりと剣をかわし、はるか上空へと飛んでいった。

「待て！」

ドラゴンはけたたましい笑い声を大地に響かせる。

「勇者よ！ 言っただろう！『我は代替可能だ』とな！」

「お前は不死身なのかァーッ！」

勇者は空に向かい怒鳴り散らす。

「不死身？ いや、それよりもっとひどいぞ！ まあもう一度見ておれ、『世界に夜明けを告げし者さん』よ」

するとドラゴンは自らの身体に炎を吐き、全身を火だるまに変えた。やがて苦しみもがきながら空を暴れ、隕石のように山肌へ墜落した。

なんだこれは？

勇者は困惑に飲み込まれそうだ。なぜ私と正当に戦おうとしない？ なぜ私に世界を救わせてくれない？ なぜここまで私を弄ぶのか？ 何か悪い夢でも見ているのか……？

ズドン！

また無傷のドラゴンが目の前に現れた。

「もう考えてられん！ 剣が駄目なら魔法だ！ 『フレイム』！」

「これでは死なんよ。達人ならこうする」

またドラゴンは自らに炎を吐きかけて死んだ。

ズドン！

そしてまた無傷で戻ってきた。

「『エンカンタード！』

「ほう、こんどは幻惑魔法か。だがまだまだだな。プロはこうするぞ」

突然ドラゴンが増殖したかと思うと、分身が本体に向かって一斉に炎を吐き出した。本体は死んだ。

ズドン！

また戻ってきた。

「『会留府一閃！』」

「効かぬ！」
竜は自らの牙を抜いたかと思うと、その牙でとっさに自らの頸動脈を掻っ切った。死んだ。

ズドン！

戻った。

「『空爆要請！』」
「阿呆が！」
突如空にポータルが開いたかと思えば、そこから七色の竜の軍団が現れ、『厄災』に向かい集中砲火を行った。死んだ。

ズドン！

「はあ……しつこいぞ！ いい加減しっかり戦え！」
「否、まだだ。もう技は出尽くしたか？」
「くそ……使うつもりはなかったのだが……仕方あるまい。究極奥義でいくぞ」
勇者は詠唱体勢に入る。エルフ族の長い髪が大きく揺らぎ、足元にエルフ語の魔法陣が展開される。

「父よ、母よ、精霊たちよ、そして私に流れる全ての血脈たちよ、わたしに闇に抗う力をお与えください。エル・スペルイェヒム・ダラゴス・イム・エン・ヒェライ・ヴェステ・エン・ティルタァーリア」
「詠唱解除」
エルフが左手を上げると、ティル・ナーグの方向から飛んできた光が彼を包んだ。
「木々に祝福されている」
エルフはまっすぐな瞳でドラゴンを見つめ、右手に持った剣を彼に向けた。

「『夜明け』がお待ちだ」
閃光が剣先から一直線にドラゴンに向かう。強烈な光が『厄災』を包む。

「わー」
ドラゴンは苦しそうだ。

「おふざけとお前の恐怖支配はここまでだ。『夜明け』を返してもらおうか」
「ハハハ！ よし、これが汝の決断なのだな。では受け入れよう。また？ 会おう」

「もう二度と貴様とは会わん！ ここで消えよ！」

光がより一層強くなり、ドラゴンの体はどんどん消えてゆく。突然光が大きくなったかと思うと、大地の大きな揺れとともに消えた。

終わった。

『厄災』の長きに渡る支配は終わったのだ。長い夜の時代は終わった。

夜明けが来る。世界を覆っていたどす黒い雲から、眩しいほどの光が差し込む。

太陽だ。

『定命の者』たちが皆待ち望んでいた光が、エルフの目をくらませた。

勝利したのだ。もう恐怖におびえて過ごす必要はない。失ったものは決して小さくはないが、それでもやり遂げたのだ。母よ、あなたの愛はたしかに受け取りました。父よ、あなたの誇りはたしかに受け継ぎました。森の精霊たちよ、あなたたちにようやく光が差し込みます。祖の偉大なる人々よ、あなたたちの仇は打ちました。

エルフ、その真の名を［Chinpooooooo］という、は、陽の光を浴びながら大粒の涙を流したのであった。

ズドン！

「おい、起きろ」

あなたは目を覚ます。

「ねぼけてる場合じゃない、ドラゴンが襲ってくるぞ！」

あなたは状況を理解し、飛び起きる。

「そういえば……名前は何といったかな？」

あなたの名前を入力して下さ

うーん。もうこのゲーム飽きたな。このオープニング何回も見てるし。六周くらいしたからオークでも人間でもエルフでもやり尽くしたしな。もうしばらくやらなくていいか。そんなことよりレポートやらなきゃ。あとひたすら電話追求の練習するか。お世話になります！

ん？ なんか変な声が聞こえるな。外を見てみよう。わ！

「汝も『代替可能』になりはしないか？ 気をつけて生きることだな」

あなたは？

「名はない。かつては『テロリスト』『魔王』『厄災』などと呼ばれていたが、それのどれも我の本質ではない」

は、はあ。

「実を言うとだな、真に『代替可能』な存在などない。それが汝の今いる世界にある、大きな強みだ」

そうなんですか。

「ああ。まあ、残念ながら真逆に考えている愚か者も少なくはない。だから騙されそうになることもあるだろう。だが、くれぐれも『代替可能』などと自分にレッテルを貼らないことだ。いいな」

わかりました。

「わかればよろしい、では、さようなら」